

# 応用言語学のみちすじ

*en route to Applied Linguistics*

土屋 澄男

There are a number of people around me who claim that they are engaged in research in the field of 'applied linguistics'. Some of them are teachers who are engaged in the teaching of foreign languages; others are researchers engaged in the pragmatic fields of linguistics, such as 'discourse analysis' or 'pragmatics'. It seems to me, however, that what the term 'applied linguistics' means is not always very clear. If the field were simply what the combination of the words 'applied' and 'linguistics' means, then the terminological problem would not arise. A mere semantic discussion on this field, therefore, would not be sufficient. In this article I will deal with the historical background of the term to show how it has been employed in concert with developments of theoretical linguistics in this century.

**キーワード** : 言語学、言語教育、英語教育、外国語、第二言語

## (1)

「あなたの専門は何ですか」に対して「応用言語学です」と答える人が筆者のまわりにふえてきた。筆者自身も以前は「英語教育」と答えていたのだが、最近は英語教育の分野をややほみ出している気がするので「応用言語学」と答えることにしている。しかしこの分野になじみのない人は「それはどんな学問ですか」ときき返してくるので、いちいち説明しなくてはならないはめになる。「第二言語の学習と指導に関する研究」などの方がよほど適切で分かりやすいかなという気がする。

そこで「応用言語学」という用語がいつ頃からどのように使われてきた

のか、またそれが今世紀における言語学の発達とどう関連しているかなどについて眺めてみることにする。ちなみに国際応用言語学会AILA<sup>1)</sup>が3年ごとに開催している世界大会を1999年に日本で開くことになっており、世界各地から約2,000人の研究者が参加する見込みだという。

(2)

今世紀の言語学はソシュールとチョムスキーという二人の天才によってリードされてきたと言ってよい。むろんこの言明に異議をとなえる人はいるであろう。しかしこの二人の著作が与えたインパクトの強さと範囲を考えると、少なくとも言語学の分野では、この二人に並ぶ人は他にないと言ってよいと思う。応用言語学の進展もこの二人に負うところが大きい。

まずソシュールであるが、『一般言語学講義』<sup>2)</sup>が出版されたのが1916年、原本はフランス語である。この革命的な書物に関して二つのふしぎがある。一つはこれがソシュールによって書かれたものではないことである。彼自身が書いたものではなかったから、むしろ曖昧さが排除され、読者に理解しやすい形になったということも言えるかもしれない。第二に、この本が外国語に翻訳されたのが日本語が最初で、英語版は実にそれから31年も経ってからであったということである。英訳が1959年ということは、ソシュールが世界的に注目され出したのは今世紀の半ば過ぎてからである。

ここに応用言語学の観点からおもしろい事実がある。第二次大戦前に日本に来て、日本の英語教育の改善のために骨を折ったハロルド・E・パーマーという人がいる。この人は1922年来日し、1923年に英語教授研究所(現在の財団法人・語学教育研究所)を設立した。彼は来日してから自らの提唱する「オーラル・メソッド」の理論的武装の必要を感じMemorandum(以下『覚え書』)<sup>3)</sup>を書いた。この中でパーマーが援用したのがソシュールの言語学であった。

パーマーが援用したのは第一に「ラング」と「パロール」の区別である。ソシュールが言うように言語学者が「ラング」を研究対象とするのに対し

て、言語教師は「パロール」に注目すべきだとパーマーは主張した。また言語単位は「聴覚像」と「概念」が一体となっているものであるから、この二つの融合をはかるように訓練することが言語教師の最初の仕事であると主張したのである。

この『覚え書』は口頭練習から入る言語教授法の根拠を明解に述べたものとして、今日でも日本ではしばしば引用される文献である。パーマーは来日前に英国人のためのフランス語教師もしていたから、ソシュール言語学の存在をいちやく知り、『一般言語学講義』を原本で読んでであろう。そして日本に来てから、ソシュール言語学の新しい概念を自分の教授法理論に援用したのである。ちなみに小林英夫によるソシュールの日本語訳が出たのは1928年であるから、パーマーの『覚え書』が出た当時、日本にソシュールについて知る人は少なかったであろう。いずれにせよ、パーマーがソシュール言語学の教育への応用を試みた最初の一人であったと言って間違いのないと思う。

(3)

応用言語学という用語が初めて人の目にふれたのは、ミシガン大学英語研究所<sup>4)</sup>が *Language Learning* という雑誌のサブタイトルに *Journal of Applied Linguistics* とつけたのが最初であろうと言われている。1948年のことである。当時のミシガン大学英語研究所は、第二次大戦中にアメリカが行ったASTP<sup>5)</sup>の成果をふまえ、スペイン語を母語とする人たちを対象とした英語集中コースの成功を内外に誇っていた。それはアメリカ構造言語学を土台にし、行動主義心理学による学習理論を援用した言語教授理論であった。その理論と実践はフリーズやラドローらの「オーラル・アプローチ」または「オーディオ・リンガル・メソッド」として第二次大戦後の世界における外国語学習を方向づけることになるのだが、これはまさにアメリカ構造言語学の外国語教育への応用にほかならない。

しかしこの言語学は1950年代末のチョムスキー言語学<sup>6)</sup>の出現によっ

てたちまちその輝きを失うことになる。またチョムスキー文法は当時のアメリカ行動主義学習理論をも破綻させることになる。チョムスキーの登場はそれほどインパクトが大きかったのである。

チョムスキーのいわゆる「変形文法」が現れた時、それを外国語教育に適用しようとする試みが各地で行われ、わが国でも1960年後半にそのような実験研究があちこちで行われ、発表された。しかしそれらの多くは文の表面構造を深いレベルの構造からの変形によって理解させるという単純なもので、チョムスキー文法がその後大きく変化したことによって、そのような応用研究は1970年代には早くも下火になったのである。

現在のチョムスキー文法の中心は「普遍文法」という概念であり、ここでは「変形」という概念はほとんど消滅してしまっている。普遍文法の目指すところは、すべての人間言語の根底にある共通の原理や条件、規則の体系（チョムスキーの言葉では「人間言語のエッセンス」）を明らかにしようとすることである。つまり、人が何語を獲得しようと、普遍文法は、人間共通の遺伝的システムとして生得的に与えられているというのである。

そこで普遍文法で記述される原理や規則はきわめて抽象性が高く、それらの言語教育への応用というのは難しくなってきた。それでも現在それらの応用がかなり多くの研究者によって考えられている。たとえば、最も根本的な問題として、普遍文法に含まれているいくつかの原理とパラメータが第一言語の獲得を規制しているとするならば、第二言語の獲得の際にもその知識がいぜんとして利用できるかどうかという問題である。これまでの研究ではその純粹仮説（すなわち、第二言語獲得は第一言語獲得と全く同等であるとする仮説）はほとんど支持されていないが、第二言語学習者の中にも普遍文法から生じたと考えられる言語行動がみられるという報告が多数なされている。第二言語学習者は第一言語をすでに内在化しているので、生得的知識を新しい言語の学習にどれだけ生かせるかを正確にしらべるのは容易ではない。しかしこれが現在の第二言語習得研究者の重要な関心事の一つであることに変わりはない。

(4)

ハロルド・E・パーマーが言語教師はラングよりもむしろパロールに注目すべきだと主張したことはある意味で正しい。なぜなら、教師は言語能力を直接的に生徒に授けることはできないからである。教師ができることは、言語運用を通じて生徒の中に徐々に言語能力を形成させることである。「言語能力」という用語はチョムスキーによるが、これは学習者自身が自分の生得的知識と現実の言語経験との交渉を通して作り上げていくものである。それは外から教えられるものではないというのがチョムスキーの考え方である。第一言語の学習者である子どもはすべて自分の力で言語能力を獲得する。第二言語の学習者も基本的には同じ立場にある。違うところは、子どもが自分の直観に従って学習を進めるのに対して、大人は理性に従って学習を進めようとする事、そして第一言語をすでに内在化していることである。いずれにしろ、言語の習得は言語運用の経験を通して言語能力を獲得すること以外にはあり得ない。

そこで言語教師の仕事はどのような言語運用をさせれば最も効率的に望ましい言語能力を獲得させることができるかにある。人は言語を用いる時、自分の獲得している言語能力に基づいて用いているわけであるが、その際、言語運用は言語能力には含まれないさまざまな要素によって制約を受ける。たとえば、相手との関係を維持するための社会言語学的制約、疲労・注意散漫等の心理生理学的制約、など。チョムスキーはこれらの制約は言語の本質的な部分ではなく周辺的な問題だと言っているが、周辺のというのは必ずしも瑣末的ということではない。言語をコミュニケーションの手段と考える傾向の強い今日においては、それらの周辺の部分が重要な問題として浮かび上がってくる。事実、これらは多くの社会言語学者や心理言語学者の研究対象となっているのである。

チョムスキーの普遍文法以外の文法研究は、大きく分類すると、ディスコースの研究<sup>7)</sup>とプラグマティックスの研究<sup>8)</sup>に分けられる。ディスコースはパラグラフ、会話、談話など、文を越える言語単位を指す。その研究

はディスコース分析と呼ばれる。このような研究がどの程度までディスコース文法として体系づけられるかはまだ不明であるが、この研究から明らかにされる言語事実は言語教育に役立つことは確かである。たとえば談話における「結束」(cohesion)や「一貫性」(coherence)の知識は良い文章を作るのに役立つことが知られている。

プラグマティックスはコミュニケーションにおける言語使用、特に語句や文が使用される文脈や状況と言葉との関係を研究する分野である。たとえば言語話者はみな文脈や場面に応じて適切な語句や文を選んで使用する能力を獲得している。そのような知識は第二言語の学習者にとっても必要な知識である。またプラグマティックスはこれまで意味論とは区別されてきたが、最近では意味論においても言語使用者とコミュニケーション機能を考慮に入れて分析する研究が行われている。<sup>9)</sup>したがってプラグマティックスと意味論の区別は必ずしも明確ではなくなっている。いずれにしても、人が言語の使用に関するプラグマティックな能力(これを「実用的言語能力」と呼ぶことができる)を獲得していることは明らかであるから、ディスコースやプラグマティックスの研究はますます盛んになるであろうし、他方でコミュニケーションのための言語教育という側面が強調される限り、それらの研究を教育に応用しようとする試みもますます多くなされるであろう。また、それらの分野の研究者自身が応用言語学を名乗ることも普通になりつつある。言語教師もむろんこれらの分野から目を話すことはできない。

<注>

- 1) AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée) は1964年にフランスのナンシーで設立された。設立当初は外国語教育と自動翻訳がその主要関心領域と考えられていた。1970年に*AILA Bulletin*が発行されるまでは、*T. (ranslation) A. (utomatique) Informations*と*IRAL (International Review of Applied Linguistics in Language Teaching)*の二つを発表誌としていた。AILAは3年ごとに世界大会を開催しており、その扱う分野は広範

にわたっているが、1970年代後半からの大会においては、第二言語および外国語の学習と教授に関連する分野に重点が置かれ、研究発表とシンポジウムのほとんどがその分野に集中している。

- 2) ソシュールの『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*)は、周知のように、ソシュール自身が書いたものではない。ソシュールが1907年、1908-9年、1910-11年の3回にわたって行った一般言語学講義を、ジュネーブ大学の二人の教授シャルル・バイイとアルベール・セシュエが、彼の死後、残されたメモや学生たちがとったノートに基づいて1冊の本にまとめあげたものである。したがって、どこまでソシュール自身が構想した言語学を忠実に反映しているかについて、現在に至るまで議論が続いている。しかしこの『講義』が言語の最も本質的な部分を扱っており、今世紀における言語学を方向づけたという点では、ほとんど異論がないと言ってよいであろう。この本の外国語訳は日本語訳が最初で1928年、ついでドイツ語訳が1931年、ロシア語訳が1933年、スペイン語訳が1945年、英語訳が1959年、ポーランド語訳が1961年、イタリア語訳が1967年と続いている(フランソワーズ・ガデ著/立川健二訳『ソシュール言語学入門』参照)。
- 3) ハロルド・E・パーマーの *Memorandum* (原題は *Memorandum on Problems of English-Teaching in the Light of a New Theory*) は『英語教授法事典』(開拓社1962)に収録されている。パーマーの提唱した「オーラル・メソッド」(Oral Method)は当時の日本の英語教師たちに必ずしも歓迎されなかったが、その真価は70年を経た今日ようやく広く認められつつある(伊村元道著『パーマーと日本の英語教育』および小篠敏明著『Harold E. Palmerの英語教授法に関する研究』参照)。
- 4) ミシガン大学の英語研究所(The English Language Institute)は1941年に創設され、C. C. フリーズが所長、R. ラドーが副所長となっている。この研究所に入学するのはミシガン大学に留学している外国人で、英語の力不足のため授業についていくのが困難な学生たちである。当初はその大部分がラテン・アメリカから来たスペイン語を母語とする人たちであった。フリーズらは4年の歳月をかけて、ラテン・アメリカの学生のための英語集中コースの教材を作成した。この努力を「オーラル・アプローチ」という外国語教授法にまとめあげたのが *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (1945) である。この新しい教授法の提唱は、第二次大戦後のアメリカ国威の高揚と、テープレコーダーやLLの普及と相まって、「オーディオ・リングル・メソッド」として、1950年代から60年代はじめにかけて、世界の外国語教育をリードすることになる。
- 5) ASTP (Army Specialized Training Program) は、第二次大戦中にアメ

リカ軍が行った外国語集中訓練プログラムである。アメリカは軍の作戦をよりよく遂行するために、ドイツ語やフランス語だけでなく、日本語などの敵国語に堪能な軍人を養成する必要を感じ、優秀な軍人を選抜して徹底した訓練を行ったのである。“Army Method” という名でも知られている。その特徴的な指導技術の一つである模倣記憶提示法 (mimicry-memorizing presentation 略して mim-mem) は、フリーズらのオーラル・アプローチでも重要な技法として採用されている。

- 6) チョムスキー言語学は1957年の *Syntactic Structures* に始まり、1965年の *Aspects of the Theory of Syntax* において普遍文法への構想が明確に示される。しかし近年のチョムスキー理論では、その内容が初期のものとは全く違って、統率・束縛 (Government and Binding—略してGB) の理論と呼ばれるモデルの諸提案に基づくものになっている。これは1981年のチョムスキーの著作 *Lectures on Government and Binding* によって総括された理論である。GB理論による普遍文法は次のように考える。すなわち、人間は、何語であれ、すべての言語に共通した一連の原理 (principles) と、言語ごとに異なる値に設定されたパラメータ (parameters) についての知識を持っている。特定の個別言語を習得するということは、これらの原理がどのようにその言語に適用され、各パラメータの値をどう設定するかの問題なのである。
- 7) ディスコース分析 (discourse analysis) は、話し言葉または書き言葉において、文がいかにしてパラグラフや会話や談話などのより大きな単位を構成していくかについての研究で、テキスト言語学 (text linguistics) という用語を用いる学者もいる。たとえば、異なる文の間の代名詞や副詞の指示関係にみられる結束性 (cohesion)、パラグラフや談話における文の意味を結びつける一貫性 (coherence)、話し手または書き手が新しい話題を導入したり、話題を変えたり、相手に対する役割関係を変化させるために用いる手段 (move) の研究などがある。最近では、教室における教師と生徒の談話について分析を行い、指導の有効性を検討したり、教師と生徒の関係の改善に利用する試みもなされている (*Longman Dictionary of Applied Linguistics* 1985 参照)
- 8) プラグマティックス (pragmatics) はコミュニケーションにおける言語使用の問題を扱う。たとえば、発話の解釈はどのように実世界の知識に依存するか、話し手と聞き手の関係によって語句や文構造の選択がどのように変化するか、言葉によって意を尽くせない時に発話者はどんな手段でそれを補うかなど、その扱う範囲はきわめて広い。わが国ではプラグマティックスの訳語として「語用論」が一般に用いられているが、この訳語が適切でないことは、その扱う範囲の広さから、しばしば指摘されるところである。
- 9) リーチは *Principles of Pragmatics* (1983) において、セマンテックスとプ



ラグマティックスの違いを次のように説明している。すなわち、伝統的セマンティックスでは次の(a)のように言語の使用者や場面から抽象された言語表現そのものの特性から意味を定義するのに対して、プラグマティックスでは次の(b)のように言語使用者と関連づけて意味を定義する。

- (a) What does *X* mean?  
(b) What did you mean by *X*?

しかし最近の認知意味論は、人が外的状況をどう認知し、それを自己の内にとり入れて解釈し、対応をしていくかという主体的な意味構成のプロセスに関心があるように思われる。深谷昌弘・田中茂範は、「人間が状況を把握し対応を思念する内的営み」を「意味づけ」と読んでいる(『コトバの<意味づけ論>』参照)。かくてセマンティックスとプラグマティックスの境界は必ずしも明確ではない。

<引用文献>

- Chomsky, N. (1957), *Syntactic Structures*, Mouton: The Hague.  
Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.  
Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.  
de Saussure, F. (1972), *Cours de linguistique générale* (éd. critique préparée par T. de Mauro, Paris: Payot. (小林英夫訳(1972)『一般言語学講義』岩波書店)  
Fries, C. C. (1945), *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.  
Leech, G. (1983), *Principles of Pragmatics*, Essex, England: Longman Group Ltd.  
Palmer, H. E. (1924), *Memorandum on Problems of English-Teaching in the Light of a New Theory*, Tokyo: Kaitakusha.  
Richards, J., Platt, J., and Weber, H. (eds.) (1985), *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Essex, England: Longman Group Ltd.  
伊村元道 (1997) 『パーマーと日本の英語教育』大修館書店  
小篠敏明 (1995) 『Harold E. Palmerの英語教授法に関する研究——日本における展開を中心として——』第一学習社  
ガデ, フランソワーズ (1987) (立川健二訳1995) 『ソシュール言語学入門』新曜社.  
深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの意味づけ論』紀伊国屋書店.